

尾張西部における中世末から近世 の非口クロ成形土師皿の諸様相

佐藤公保

尾張では古代までは「皿」は主に須恵器・灰釉陶器であった。中世になると土師器の「皿」が出現し、中世後期になり、その量は激増する。そうした土師皿のなかには非口クロ成形とロクロ成形のものがあり、前者は「ハレ」・「ケ」の場で主に使用されたと考えられる。中世に出現した非口クロ成形土師皿は近世になると、大きく姿を変えていくことになる。

はじめに～研究略史～

尾張における中世から近世の土師皿の研究は、1984年から開始された名古屋環状2号線に伴う清須城下町の発掘調査の成果の検討から始まる。筆者はそのなかで、朝日西遺跡の中世から近世初めの土師皿の変化を提示した。その後、1986年に始まる五条川河川改修や県道関連の発掘調査が進むなかで、それまでの清洲城下町遺跡の調査成果を集大成する調査報告書として『清洲城下町遺跡』(以下、『清洲』)と略。他の愛知県埋蔵文化財センター調査の報告書も同じ。)が刊行された。そのなかで鈴木正貴は膨大な量の陶磁器類や土器類の分類及び時代変遷の考察を行っている。

清須城下町での発掘調査が進むなか、その周辺地域で清須城下町と同時期または相前後する時期の城館の発掘調査が実施された。主なものを上げると、岩倉城・小牧城・那古野城などの関連遺跡がある。さらに1990年からは東海北陸自動車道の建設に伴い、尾張西北域の中世から近世の遺跡の発掘調査も数多く実施された。これらの成果をもとに武部真木が尾張の低地部全域を見据えて、土師皿のセット関係を重点においてまとめている(武部2001)。

ここでは土師皿、そのなかでも非口クロ成形土師皿を取り上げ、近世城下町としての名古屋が形成されるきっかけとなった「清須越」前後の

『清洲』中で蟹江吉弘は、総破片数と口縁部残存率で出土量を出しているが、ここでは口縁部残存率の数値を元に割合を算出している。

時期(慶長15～18(1610～1613)年)を中心に、名古屋台地以西の清須城下町内とその周辺域での様相をみていきたい。

1 非口クロ成形土師皿の性格

中世末から近世にかけて尾張西部では、非口クロ成形土師皿とロクロ成形土師皿が共存する。前者の法量が、口径4～8cm、器高0.8～2cmと小型のものがほとんどに対し、後者は口径6～18cm、器高1～3cmに2から3法量のものがある。

使用された痕跡の比較については、『清洲』のSD01において詳細な分析が行われている。溝からは古瀬戸後期から大窯1～2期を主体とする瀬戸・美濃窯製品が下層で出土し、同一層で土師皿の一括投棄がみられた。そこで出土したロクロ成形土師皿の12%に灯明具として使用された痕跡が残り、0.02%に穿孔された痕跡が、1%に墨書された跡がみられる。それに対し非口クロ成形土師皿は同遺構内において、2%に灯明具として使用された痕跡が残り、0.03%に穿孔された痕跡がみられる。墨書される例は皆無である。これらは両者の使用法が一致する一面を持ちながらも、本質的には使用法が相違していることを示唆している。

そもそも12世紀後半から全国各地でみられる非口クロ成形土師皿である京都系土師器は、京文化の影響をうけ、製品そのもの・工人・製作技

法が直接的、または間接的に搬入・移動・導入された結果、鎌倉・平泉などを代表とする地域の拠点的な遺跡を中心として広がった。室町時代には公家文化の影響を受け、式三献などの儀礼が武家社会に定着するなかで、全国に京都系土師皿が伝播していった。そうしたいわば「ハレ」の場で使用と共に、当然、「ケ」の場での使用も同時に広がっていく。

この傾向は尾張地方でも同様であるが、尾張では15世紀後半に入ると、京都系土師皿をはじめとする非口クロ成形土師皿が存続すると同時に、口クロ成形土師皿が出現するという尾張地方独自の状況が生じる。口クロ成形土師皿の出現の意義、非口クロ成形土師皿との関わりについては今後の課題としておきたいが、おそらく、口クロ成形土師皿は再出現当初、非口クロ成形土師皿同様、「ハレ」「ケ」の場での使用も担わされたと考えられる。

2 非口クロ成形土師皿の分類と各タイプの分布

中世末から近世にかけての尾張西部で出土する非口クロ成形土師皿は、以下にあげる形態・成形・調整がみられる。

先に触れたように非口クロ成形土師皿は全て小型の皿であり、形態的特徴は乏しい。形態で分類すると以下の5つの形態に分かれる。(図1)

- ・・体部と底部の境界が明確で、体部の立ち上がりが1~1.5cmあるもの。器高1.0~1.5cm、口径6~7cmを測る。
- ・・体部と底部の境界が明確で、体部の立ち上がりが極めて短く0.5~0.8cmであるもの。器高0.8~1cm、口径6~5cmを測る。
- ・・体部と底部の境界が不明確で、体部と底部が一体化し湾曲するもの。器高1~2cm、口径4~5cmを測る。
- ・・体部と底部の境界が不明確で、体部と底部が一体化し湾曲し、底部中央が凹むものの。器高1~1.2cm、口径5.5~6cmを測る。

本稿で提示した実測図は原則として報告書記載のものを使用しているが、一部、未掲載分や表現が不明確なものについては図を取り直している。

・・体部の立ち上がりを有せず、平たいもの。器高0.8~1.2cm、口径5~6cmを測る。

次に内面の成形・調整痕により分類を試みると、以下の5つに分類できる。(図2)

- A・・体部内外面は外周なで、内面のなでは内底面まで及ぶ。
- B・・外縁に外周なで。
- C・・内底面に横なで。
- D・・内面に指頭圧痕が残るもの。
- E・・内面に布目痕が残るもの。

さらに底部に残る成形・調整痕により以下の5つに分類できる。(図3)

- a・・底部には成形・調整痕はみられないもの。
- b・・掌または指の腹の痕跡をなで消すもの。
- c・・掌または指の腹の痕跡が残るもの。
- d・・指頭圧痕が残るもの。
- e・・布目痕が残るもの。

3 非口クロ成形土師皿の出土した主な遺跡と遺構

以上、分類した非口クロ成形土師皿の分布の状況をまず、「清須越」前後の清須城下町内(図5)の2地点の事例をみてみる。

朝日西遺跡 SD177(図6)

朝日西遺跡は清須城下町の北東にあたり、五条川と清須城の外堀に挟まれた地区に位置する。武家地・町屋・寺社地が展開すると考えられ、外堀に近接し併走するSD177は寺社を区画する幅7m、深さ0.8mの大溝である。溝からは瀬戸・美濃窯の大窯4期末から連房第1小期の陶器の他、卒塔婆・位牌などの木製品や人骨・獣骨が出土している。土師皿は口クロ成形のものが寺社の敷地内から溝肩に一括投棄された状況で出土し、非口クロ成形土師皿は陶器・木製品などと共に溝中の埋土から出土している。確認された非口クロ成形土師皿は-A-a・-C-b・-C-c・-D-b・-D-c・-E-c・-E-e(図13-1~7同順)と7タイプに及ぶ。このうち、-C-b、-C-c、-D-b、-E-cが主体をなす。この溝は上限が出土遺物から「清須越」直後であると思われる。

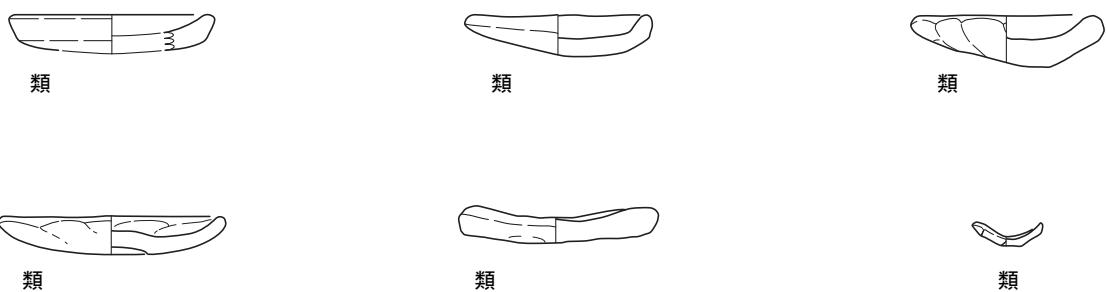


図1 土師皿 形態



33

図2 土師皿 内面成形・調整

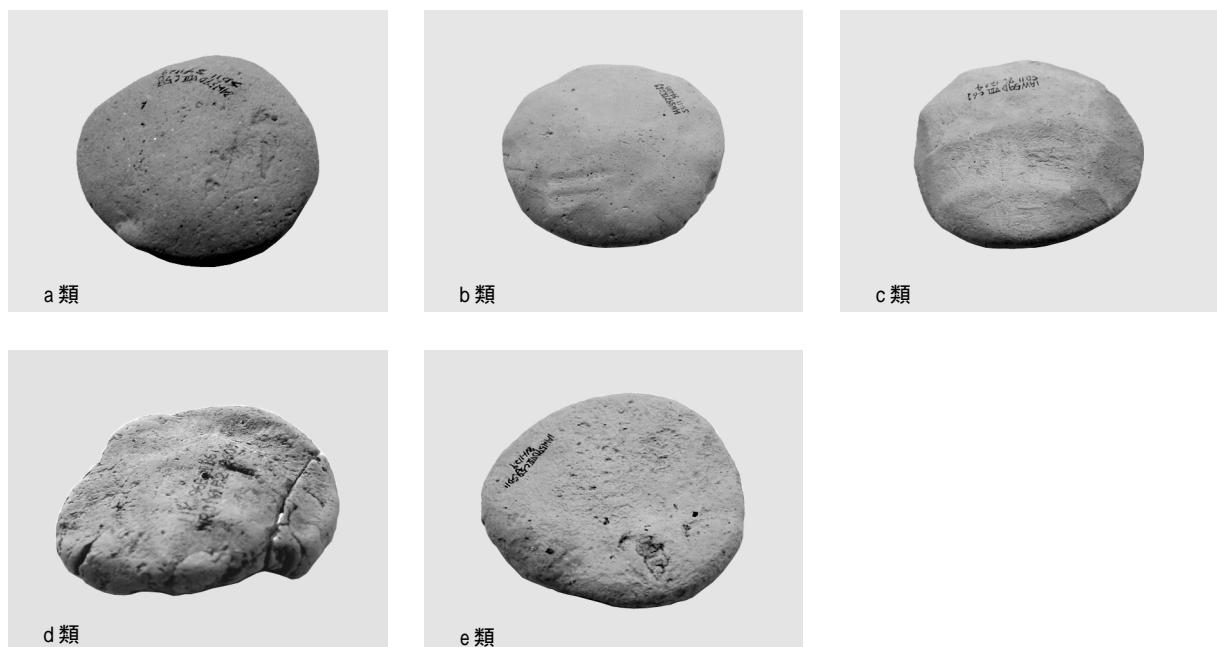


図3 土師皿 底部成形・調整

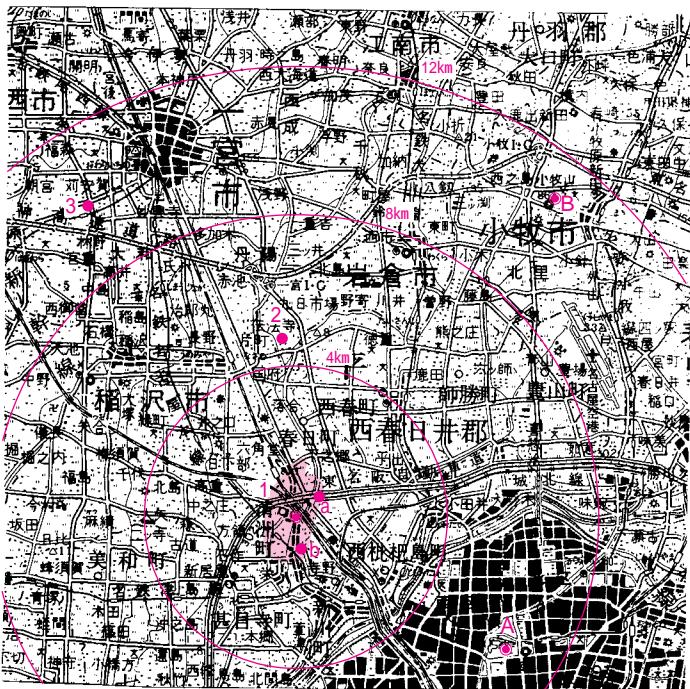


図4 遺跡位置図

1 : 清州城下町

a : 朝日西遺跡

b : 清州城下町遺跡

(『清州』・『収録』)

2 : 元屋敷遺跡

3 : 刘安賀遺跡

A : 那古野城

B : 小牧城

(1:20,000 地勢図「名古屋」国土地理院)

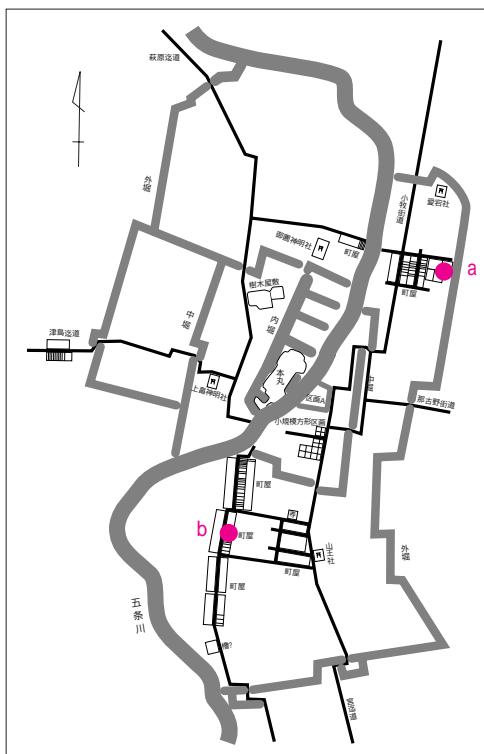


図5 清州城下町

a:朝日西遺跡

b:清州城下町遺跡 (『清州』・『収録』)

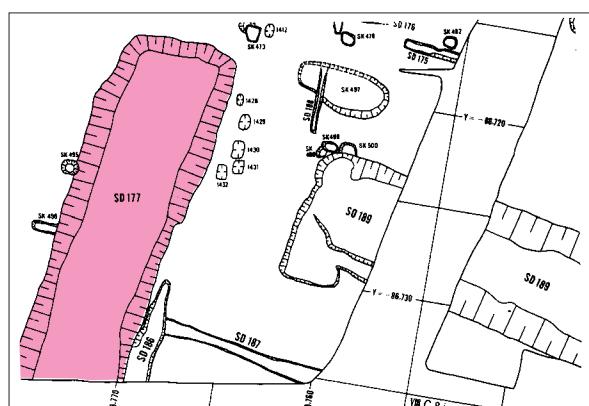


図6 朝日西遺跡 SD177

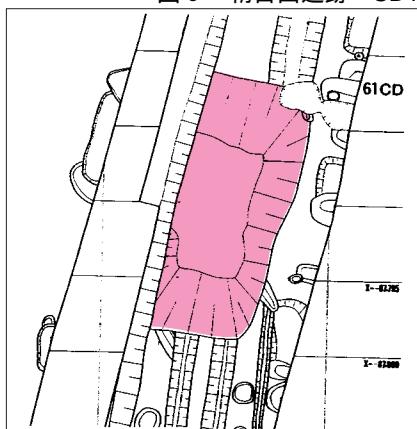


図7 清州城下町遺跡 (『清州』・『収録』)

SK7029

清須城下町遺跡 SK7029 (図7)

清須城下町の中央よりやや南に位置し、現行の五条川の東に近接する。SK7029は東西7m以上、南北17mの方形の大型土坑であり、瀬戸・美濃窯の陶器の大窯4末から連房第5小期の製品や肥前系陶器などが出土している。清須城下町内の町屋に伴う廃棄土坑であり、出土遺物から「清須越」以降も、開口した状態であったとみられる。土師皿は陶器類に共に遺構内から均一的に出土している。非口クロ成形土師皿は -A-a・-C-b・-C-c・-E-c (図13-8~11同順) がみられ、-C-c が主体をなす。-A-a と -C-b は破片で数点確認したのみである。

上記、清須城下町内の2地点では、浅く湾曲した内底面に横なでを施し、外面に掌または指の腹の跡を残す -C-c と、形態と底部外面の成形法は前記したものと同じで、内底面に布目痕を残す -E-c とが共にみられる。この2タイプの非口クロ成形土師皿が16世紀末から17世紀初めの清須城下町内の一般的にみられるものであり、特に -C-c は2地点で主体を占めるタイプであることから、この時期の清須城下町内での典型的な非口クロ成形土師皿のタイプといえよう。

一方、2地点の相違もみられる。その一つは SD177 では7つのタイプの非口クロ成形土師皿が確認されたのに対し、SK7029 では4つのタイプしか確認されていない点である。この違いは、前記したように非口クロ成形土師皿が「ハレ」「ケ」の場での使用頻度が高い点と、前者が寺社地の区画溝であり、後者が町屋に伴う廃棄土坑である点を合わせ考えると、タイプによる使い分けが存在し、儀礼行為の相違が具現化した結果かもしれない。また、この2つの遺構の埋没する時間的差を考えると、「清須越」を相前後する間ににおいて、-C-c 及び -E-c の二つのタイプだけが残ったとも考え得る。

次に同時期の清須城下町周辺の遺跡の状況をみてみる。以下にあげる2遺跡は現在の一宮市内に所在し、清須城下町から北に6~10kmほど離れている。

元屋敷遺跡 D-S163 D-S328・332 (図9)

当遺跡は清須城下町から北へ約6kmほど離

れ、南に五条川と西に青木川に挟まれた微高地上に位置する。溝によって区画された一辺12~25mの方形区画が五つ以上存在し、さらに一辺12mの区画二つは52m前後の大区画内に配せられる可能性がある。一辺12mの区画の一つである「方形区画」に近接して D-S163、D-S328・332 は存在する。前者は調査区の東に位置する廃棄土坑で、瀬戸・美濃窯の大窯4期末の陶器が出土する。非口クロ成形土師皿は -C-c・-D-c・-D-c・-B-a・-D-c (図13-12~16同順) があり、-D-c・-B-a が主体である。後者は調査区の東にある井戸で瀬戸・美濃窯の大窯4期末からの連房第2小期までの陶器が伴う。-A-a・-C-b・-C-c・-E-c・-D-c (図14-17~21同順) がみられ、-D-c が主体である。これらの遺構から出土している土師皿は、一定箇所に集中するなどの特出する出土状況は呈しない。共に「方形区画」より後出する遺構であり、屋敷地に伴う遺構と考えられる。なお「方形区画」内には柱穴群が集中して整然とみられ、報告書中では「何らかの聖域」または「宗教的施設」としての性格を類推している。

苅安賀遺跡 96G・NR01 (図11・12)

清須城下町から北へ約10km離れた当遺跡は日光川の東岸の微高地上に立地し、周辺には16世紀後半から17世紀初めに苅安賀城とその城下町が存在したとされ、その南の一角に相当する。自然流路NR01は調査区の南側にあり、ほぼ東西方向に走る。土師皿や卒塔婆が出土していることから NR01 がある遺跡の南辺を「祭の場」としている。この流路は近世になると水田が展開し、18世紀には用水路が開削される。出土遺物は大窯4期末の瀬戸・美濃窯の陶器が主であり、非口クロ成形土師皿は流路の埋土である砂層からまとまって出土している。-D-c・-E-b・-D-c・-D-d (図13-26~29同順) がみられ、-D-c が主体である。

上記の2遺跡の非口クロ成形土師皿をみると、清須城下町内と同一タイプで両遺跡でみられるものと清須城下町ではみられなく両遺跡でみられるものとがある(表1)。前者は体部と底部の境が不明確で内面に指頭圧痕がみられ、底面に掌または指の腹の痕跡が残る -D-c と、体部と底部の境が不明確で内面に布目痕がみられる -



図8 莖安賀遺跡96G・NR01土師皿出土状況

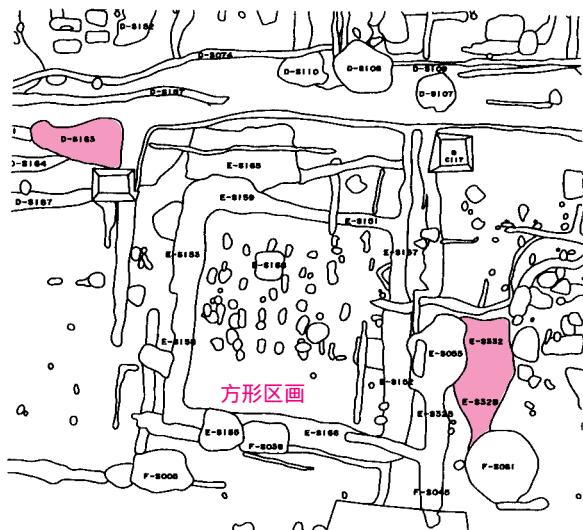


図9 元屋敷遺跡D-S163・E-S328・332
(一部加筆)

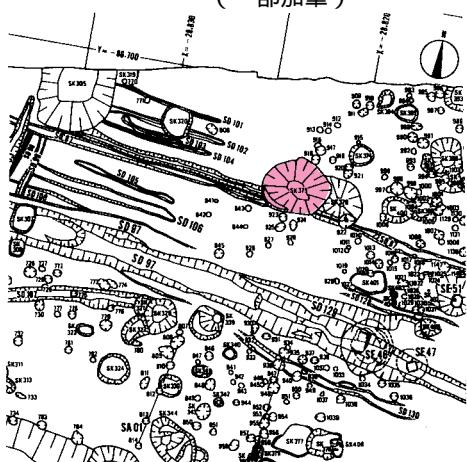


図 10 朝日西遺跡 SK375

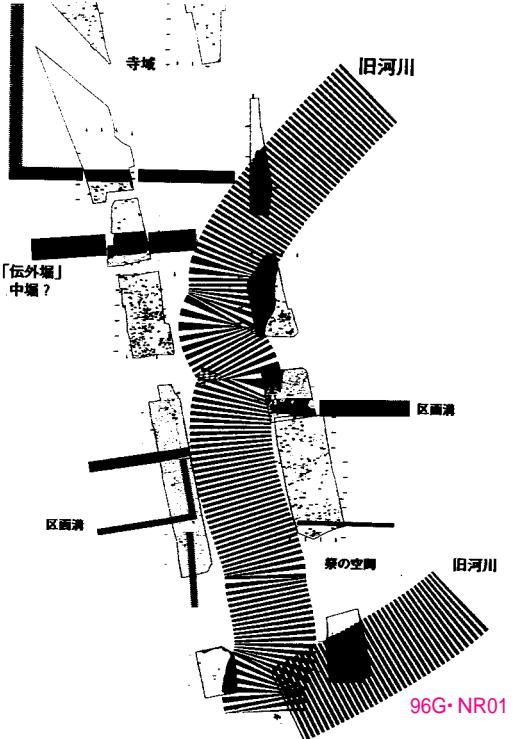


図 11 莖安賀遺跡 96G・NR01

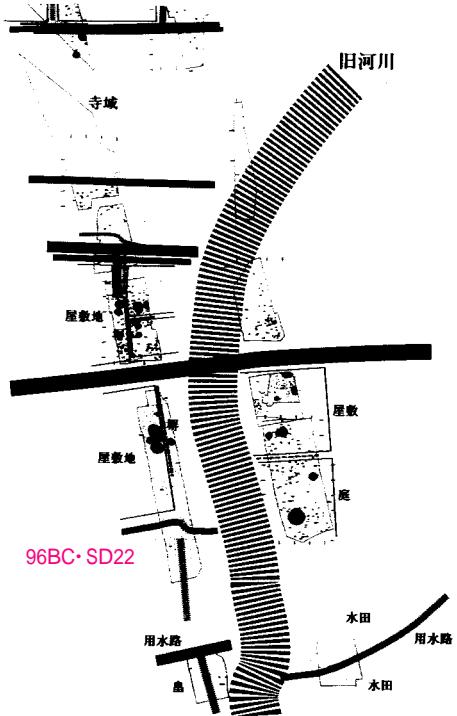
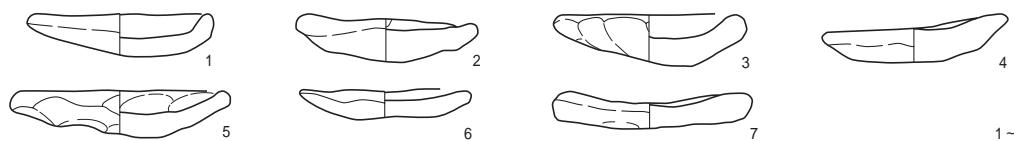


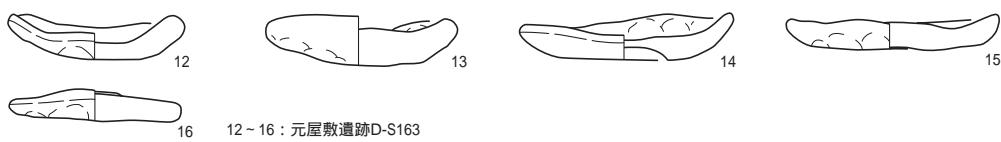
図12 荘安賀遺跡96BC・SD22



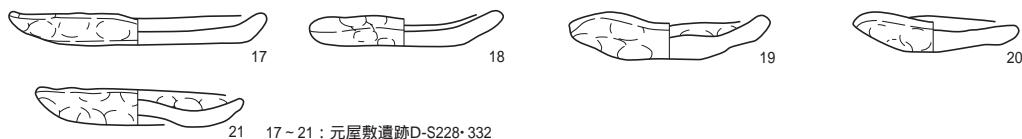
1~7: 朝日西遺跡SD177



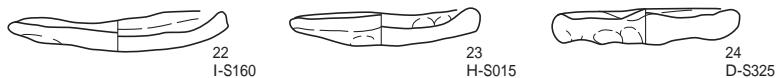
8~11: 清州城下町遺跡SK7029



12~16: 元屋敷遺跡D-S163



17~21: 元屋敷遺跡D-S228-332



12~25: 元屋敷遺跡



26~29: 芦安賀遺跡96G-NR01

図13 近世初の非口クロ土師皿



30~32: 朝日西遺跡SK357



33~35: 芦安賀遺跡96BC-SD22

図14 近世の非口クロ土師皿



E-b である。なお、 -E-b (図 13-23) は事例としてあげた元屋敷遺跡の遺構中にはみられないが、当遺跡の同時期の別遺構 (H-S015) から出土しており、当遺跡の該当期に存在したとしても差し支えない。後者は体部と底部の境が不明確で底部が浅く凹み、内面に指頭圧痕がみられ底面には掌または指の腹の痕跡が残る -D-c であり、両遺跡の非口クロ成形土師皿の主たるタイプである。これは尾張北西部に分布する典型的な非口クロ成形土師皿と言えよう。また、 -A-a・ -A-a・ -C-b・ -C-c・ -E-b・ -E-c・ -E-e は清須城下町と元屋敷遺跡とでみられるタイプであり、清須城下町と元屋敷遺跡では比較的、共通した分布様相を呈する。

両遺跡で共通してみられる -A-a (図 13-22) と -E-e (図 13-25) は元屋敷遺跡の事例遺構からはみられなかつたが、該当期の別遺構から出土している (前者は図 13-22 。後者は図 13-25 。)

なお、元屋敷遺跡の D-S328・332 及び清洲城下町遺跡の SK7029 で確認された -A-a は、中世初めに初現する京都系土師皿の系譜上にあるものである。形態や成形・調整法から清須城下町では -A-a へと、元屋敷遺跡では -A-a へ、さらに -B-b へと形態が変わっていくと考えられる。大窯 4 期末から連房第 2 小期の間に形態の変化が生じると想定されるが、現時点では各々のタイプの変化する時期は不明である。

4 非口クロ成形土師皿の終焉

前項まで、17世紀前半までの非口クロ成形土師皿の様相について記してきた。それでは17世紀後半以降、非口クロ成形土師皿はどうのような変遷をたどるのだろうか？

17世紀後半以降、非口クロ成形土師皿を出土している遺跡・遺構はそう多くない。その中で以下に記したものは比較的、まとめた出土例である。

朝日西遺跡 SK375 (図 10)

清須城下町は「清須越し」以降、名古屋城下近在の美濃街道沿いの宿場町または村に変貌する。

名古屋市教育委員会の豊三蔵通遺跡第 7 次発掘調査で出土している。遺物は見晴台考古資料館で実見させていただいた。

その中で朝日西遺跡は「朝日村」にあたり、SK375 は廃棄土坑である。出土遺物は連房第 1 小期から連房第 10 小期の瀬戸・美濃窯産の陶器や肥前系磁器などがみられるが、連房第 5・6 小期のものが中心である。ここで出土した非口クロ成形土師皿は体部の立ち上がりを持たず、二つ折りになる形態 (以下、「類」とする。図 1) が新たに出現し、 -E-c・ -D-c・ -D-d (図 14-30 ~ 32 同順) がみられる。各タイプの法量は -E-c が口径が 3 cm 、器高 1.2 cm 、 -D-c は口径が 3 cm 、器高が 0.8 cm 、 -D-d は口径が 2.7 cm 、器高が 0.8 cm を測り、17世紀初めのものと比べると、全体的に小振りになる。竜安賀遺跡 96BC 区 SD22 (図 12)

竜安賀遺跡は近世には巡見街道沿いの市場町に変貌する。調査区は町の外れの溝であり、18世紀後半の瀬戸・美濃窯産の陶器や肥前系磁器などが出土している。また、焼成後底部穿孔の口クロ成形土師皿が共伴している。非口クロ成形土師皿は -E-c・ -D-c・ -D-d が出土している (図 14-33 ~ 35 同順) 。各々の法量は -E-c は口径 2.8 ~ 3 cm 、器高 1 ~ 1.3 cm 、 -D-c は口径 3.2 cm 、器高 0.9 cm 、 -D-d は口径 2.3 ~ 2.5 cm 、器高 0.8 ~ 1 cm である。主体は -E-c である。

17世紀前半に多くのタイプがあった非口クロ成形土師皿は、この時期に -E-c・ -D-c・ -D-d の 3 タイプに減少し、また尾張西部一円で同一タイプが分布する。各タイプの変化をみると、

-E-c は 17 世紀前半までのものに比べ法量が減少する。また、18世紀後半のものは出土例全て赤味を帯びた胎土であり、同一集団が製作していた可能性が高いと考えられる。内外面の成形・調整法から、 -D-c は -D-c からの、 -D-d は -E-e からの系譜がたどれると考えられる。

非口クロ成形土師皿の下限の時期については、朝日西遺跡の例をみると 19 世紀まで下がる可能性もあり得る。ただ竜安賀遺跡の例では共伴遺物の年代が 18 世紀後半までに収まること、また、名古屋城下の豊三蔵通遺跡でも 18 世紀後半の廃棄土坑から小法量の -E-c が出土していること、他の近世の遺跡で 19 世紀代の遺構から出土した

例が現時点では皆無であることを併せて考慮すると、18世紀後半までに収まると考えられる。

まとめにかえて

尾張西部において、近世初めの非口クロ成形土師皿をみると、清須とその北部周辺域では、前者が-C-c、後者が-D-cと、各々が異なるタイプが主体を占める。また、両地域でみられるものや、偏った分布を示すものがみられ、非口クロ成形土師皿各タイプの分布域が相違していることが明らかになった。背景には各地域に根付く製作集団の存在し、各々が固有の流通域を有していることが想定できる。今後、さらに清須城下内と周辺遺跡の事例検証を行い、その実体を検討していく必要がある。

非口クロ成形土師皿は18世紀後半には消滅することが判った。その課程において、少なくとも18世紀前半には近世初めまでは多数のタイプがものが、確認されたもので3タイプに減少する。また、前記したように、17世紀前半までは

尾張西部において各タイプがそれぞれ流通域を有しているのに対し、遅くとも18世紀後半には3タイプが尾張西部一円で分布していることが予想される。この点については、尾張全域での様相を展望しながら、いつからそうした傾向がみられるのか、その背景になにがあるのかは慎重に検討していく必要がある。今後の課題としたい。

遅筆のため、尾張全域を見据えた検討ができなかった。特に「清須越」以降、尾張の中心地である名古屋城下とその周辺地区の動向は検証が必要である。概要のみ記すと、清須城下町と名古屋城下の様相は類似するが、名古屋城下と尾張南部とでは様相が異なるようである。このことについての検討は別稿で行いたい。

本稿をまとめるにあたって、本センター職員の小澤一弘・鈴木正貴・武部真木の諸氏には過去の調査などについて様々な助言を頂き、土本典生・永井伸明・立松彰・水野裕之・山田鉄一の諸氏には資料の実見・活用に御快諾・御協力を得た。文末であるが、記して感謝したい。

参考文献

- 石黒立人編 2001『竜安賀遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
蟹江吉弘編 1996『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
金原 宏 1986『清洲城下町の堀の復元』『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1986『中世土師器研究ノート(1)』『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1987『中世土師器研究ノート(2)』『年報昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
鉢柄俊夫 1999『平安京出土土器の諸問題』『中世村落と地域性の考古的研究』大巧社
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
土本典生編 2000『元屋敷遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会
武部真木 2001『中世土師器皿の様相 - 12~16世紀の尾張平野 - 』『考古学フォーラム13』愛知考古学談話会
中井淳史 2000『武家儀礼と土師器』『史林』第83巻第3号史学研究会

那古野城の非口クロ成形土師皿は、-A-a・-A-a・-C-cが主体であり、尾張南部の清水寺遺跡(名古屋市)・弥勒寺遺跡(東海市)では、口径10cm、器高2cmほどの外面に指頭圧痕、内面に横なでが残る非口クロ成形土師皿が出土している。

表1 非口クロ成形土師皿 タイプ別出土状況

: 少量 : 多量

遺 跡 タイプ	遺構	朝日西遺跡		清洲城下町遺跡		元屋敷遺跡		苅安賀遺跡	
		S D 177	S K 357	S K 7029	D - S 163	D - S 328・332	N R 01	S D 22	
I - A - a									
II - A - a						*			
III - C - b									
- C - c									
- D - b									
- D - c									
- E - b						*			
- E - c									
IV - D - c									
V - B - a									
- D - c									
- D - d									
- E - c						*			
- E - e						*			
VI - D - c									
- D - d									

(* は、上記遺構内で、確認できなかったが、遺跡内の他の同時期の遺構で確認できたもの)